



櫻之辨
櫻品

洪

14
137
43



門僧4
號137
卷42

梅之癖

181
54

櫻之辨

櫻之辨

山崎敬義 著

倭國より專ら花といはれざるは、桜を御とて、秋葉といふは、此
 花神代より、けりや大山祇の女、天より、桜の木の降
 りて、木花開那姫といはれ、代りて、履仲天皇禁
 池の舟、桜の花の散り、舟を、内を、花の
 宮、平城天皇、桜の花の、昔在幽巖下。花光照
 四方。忽逢攀折客。含笑且三陽。送氣時多少。垂陰然短長。如
 何此一物。擅美九春場。嵯峨天皇

十雨宮養書川集 櫻之辨

和仁三年二月神泉苑の御幸ありてふを以て詩を作

しとて宴の監録ありて 文徳天皇仁壽元年

小倉原の良房の館に御幸ありて桜花を以てて詩を作

り 宇多天皇寛平七年神泉苑の桜を以てて菅丞相

供奉ありて 業平歌

世の中よくよく桜のふりてはよのふりてを

とて天喜四年の桜を以てて記をよ

袋草子とて 牡丹を花玉とて 于武陵の白桜樹の詩記

とてや侍人の歌ありて

得花開雪滿枝。和風和蝶帶花移。只今花落遊蜂去。空作主人惆

悵詩。とて萬首唐人絶句第八卷ありて 唐の改陽春の歳前

の桜葉の赤折を以てて山櫻先春発。紅莢滿霜枝。幽處竟誰見。芳

心空自知。侶今朝日照。疑良晚風吹。欲問含彩意。恐驚輕薄兒。

とて十二行撰ありて 宋の王安石山櫻の詩ありて 山櫻抱石映

松枝。並以餘花發最遲。頼有春風嫌寂寞。吹香渡水報人知。

及甫集第二十卷ありて 彼國の桜ありて 徒我

の桜枕ありて 事ありて 桜ありて 本州を

凡櫻桃之類。其色之紅者。其味之酸者。皆倭國所產也。但今所名和。其味之甜者。其色之紅者。皆倭國所產也。祖の櫻桃のト。其味之甜者。其色之紅者。皆倭國所產也。楊廷秀の櫻桃の詩。櫻桃花發滿晴柯。不睹嬌饒只睹多。落盡江梅餘半朵。依然風韻合還他。其味之甜者。其色之紅者。皆倭國所產也。聚の菓實の部。櫻桃を云。廷秀の詩。衆圍の下。其味之甜者。其色之紅者。皆倭國所產也。桃の外。別の櫻桃。其味之甜者。其色之紅者。皆倭國所產也。

垂絲海棠。沈立海棠記。江浙間又有一種。柔枝長蒂。顏色淺

紅。其英向下。謂之垂絲海棠。出橋李仲遵玉路花史。羅山隨筆曰。日本稱櫻花曰花。猶言洛陽牡丹。成都海棠也。中夏詩文未多詠櫻花者。我朝文字神者。取王荆公山櫻抱石映松枝詩。以為是。雖然余常見全芳備祖。櫻桃下載此詩。則與我朝所稱之花不同。然則中華詩人所詠櫻花是櫻桃也。古詩山櫻發欲燃。唐詩白櫻桃下紫綸巾。皆是歟。

櫻
品

櫻之辨 終

花品

櫻品

松岡玄達 又著

熊谷櫻

彼岸櫻の八重也開事最遅故名花の先登なり
昔源平振州一谷の合戦熊谷次郎直実為先登ゆ此
花小く色赤或曰又千葉のあり千葉難波様
似たり此非熊谷乃藝花家に謂揚貴妃也似緋桜而小也又單
瓣大輪似芝山桜而色帯紅暈者呼熊谷是也非也此乃さ
櫻也

村雨三後書川集 櫻品

兄分の胤也。補文章生。繼刺肥州。後斷髮隱撰州古曾部。更名能因。性嗜好和歌。偶惜春望金龍寺。山路無入落花寂。能目不_レ知歸。日昏鐘動。時詠和歌。人至今誦之。能因法師。

山寺のまゝの夕暮りもいづれかあまのうらみをひらきけり

真櫻

損軒花譜曰。撰津國金龍寺。真櫻。一花十餘株あり。花八重。少くは辨る。序尾の花は。京都の伊勢松と同時なり。

桐谷

一名八重。一名車返。花中第一品。莫過于此。一枝の中八重。一重。雜なり。其中八重多し。一重少し。此江戸撰。元出於鎌倉。桐谷故。相傳。此花を秘す。一人ハハを。云々。相論不決。車を返す。一人執之。各如所説。因名車返と云。

江戸櫻

八重似桐谷。莖長し。垂色濃し。但し。盛過不散。枝を凋。人。形狀不宜。花々諸櫻の中。富貴なり。時々。開。事す。一。江戸。桐谷。次。少。醉。色。あり。

法輪寺櫻

江戸の上品也小瓣小輪開くして江戸より西へて

江戸法輪寺

此法輪寺最豊富重なる江戸櫻比于之江戸ハ

豊富あり桜の一種なり江戸桜の原より大輪なるあり智恩

院黒門を入右手の小口より二本目まで茶店其下より

法善寺恭山府君

按是即江戸法輪寺也非別種

殿櫻

單瓣のく白五瓣也芝山ハ開く最早殿櫻ハ次之芝山の小輪
白色なるもの且芝山ハ六瓣殿櫻ハ五瓣此其異也

普賢像

花一處に攢簇して芽も色赤く花中葉ハ何れも二より青
芽二箇花瓣の間で雜出しく茶芽より卷葉五六分の長花形
はさしめて不甚張り葉は五六輪一何れも奥州仙
臺より此を南殿桜より小京都より南殿桜より大輪のりや

塩竈

ハ花と糸と雜出ツ葉は可見の儀を塩竈の冬に

美をくわくしきりてきりてのくわくしきりて候てのくわくしきりて和語を以て小輪花開を
花形ありてくわくしきりてくわくしきりて牡丹の遠山とくわくしきりて
くわくしきりてくわくしきりてくわくしきりて牡丹の花辨少く無くはくわくしきりて不
起き小也

太山府君

與虎尾全同但花之處と接後一枝有曲折虎尾ハ枝長く與曲折
花相連至末までくわくしきりて一枝の間断續くわくしきりて花はくわくしきりて不
損をくわくしきりて花ハ千辨ありて與虎尾無異一類ありて別は洛陽智
恩院方丈の垣の内より外よりくわくしきりて也桐谷也其向く西の方門内

茶場の生垣の外ありて本卷山府君也太山府君ハ皆ハをくわくしきりて相
谷ハ八重と重くくわくしきりて不_レ以之可辨也太山府君ハ今よりハ
虎尾也

楊貴妃

有二種藝苑家よりくわくしきりて今_レ能櫻と同一小輪千辨ありて
色淡紅くわくしきりて跡はくわくしきりて或曰但似江戸大輪重辨の底ありてくわくしきりて
江戸の衣白くわくしきりて先_レ此を以て辨ありて単辨のくわくしきりてありて
志_レ此単辨のくわくしきりて良有明あり

有明櫻

單瓣白色又八重より或曰即江戸也種類一物也但比江戸少
し赤くあり

絲之

千瓣大輪一處に二三ヶ花接簇し如球一名手球色薄赤花
瓣大也

大提灯

千瓣白色枝頭を攪りし此大手球の垂絲の如きもの

手球 即絲括の小輪千瓣の如きもの

緋櫻

千瓣小輪莖長下垂未開時甚紅開展し色淡紅甚似紫菊
此淡紅白暈をとり楊貴妃と云蓋一類二色也又薩州の緋桜
の如きもの名同花形大異也薩州より琉球にわたり路に千の嶋
あり其花より開らば尤も春初既爛熳芽自冬生を花形
ハるに紅梅の如き甚紅に赤の樹皮全く移り不交東山泉涌寺
悲田院に一株あり願應院所寄予親目撃す但不着花也花師
所呼楊貴妃甚常と呼べ緋櫻の如きもの花緋桜より小也小輪
千瓣薄紫の小菊をとりて其莖の時ハ赤く開放を以て白く紅
暈あり花稀疎花瓣内の瓣ハ不開とあり中よりあり

樓間

本出自仙洞今處に遍一 後水尾院勅命此種桐谷の宮を
 うくは愛仙院の樓下の間に生け花は江戸重瓣色美艶なり今
 聖護院青蓮院及諸公卿家多接其種士庶の家にも漫水り江
 戸の如く茎短し花形桐谷の如く小輪但桐谷ハ八重一重なり
 樓間ハ皆八重中々ひひくは江戸の如く但し茎短し二種
 共々桐谷の重なりし樓間の宮々清水谷教を二株あり予目撃
 するハ單瓣花形海棠の如く芝山と大同小異
 虎尾 此花最遲枝條花形甚似泰山府君但虎尾花一處に不籠

大山水蓮

香櫻 千瓣紅色有香氣馥郁なり小輪花疎なり
 若櫻 夫木集頭季秋

若櫻の宮あり皆非枝一本に長し其葉の振をさるる

犬櫻 此木系桜の葉の如く花不足觀小花簇生穂をさるる

即一名南扇桜一名上溝其葉勢多き其色味似杏仁好平士

塩藏々名花酒料法山中より洛東祇園林に殊多き實六月

と勢多夫木集祿大桜後頼の款なり

山陰、瘴行不毛、松あり、
排櫻 一作火櫻 夫木集躬恒の抄

梓、
夫木集信實の抄

秋、
樺櫻 犬櫻の類也、
信州飯田、
中、
本草細目、

秋、
樺櫻 犬櫻の類也、
信州飯田、
中、
本草細目、

信州飯田、
中、
本草細目、

中、
本草細目、

本草細目、

甲斐の國、
淺茅、
あ、
門、
馬場、
町、
あ、
譜、

甲斐の國、
淺茅、
あ、
門、
馬場、
町、
あ、
譜、

あ、
門、
馬場、
町、
あ、
譜、

門、
馬場、
町、
あ、
譜、

馬場、
町、
あ、
譜、

町、
あ、
譜、

あ、
譜、

譜、

譜、

譜、

不可充之也

黄櫻 八重大輪色茶色

霧谷 以下出地錦抄。形状不詳者多。暫載于此。以俟訪問。

猩 南殿 岩石 正宗 爪紅 関山 以上未詳

奈良櫻 此八重櫻也。伊勢大浦ノ歌云

いんげんのくはりのひまわりくくくくくくくくくくくくくくくくく

車返 即相谷ノ異名

麒麟櫻 仁和寺 金王

鷺尾 即芝山の別名

名嶋 萬葉紅小輪此亦普賢像の萬葉紅小輪の字

殿櫻 單五瓣白全く芝山ノ櫻也芝山の變也芝山ノ開

時最早ノ輪大ノ六瓣殿ノ開ノ次芝山輪小ノ

了五瓣此其異なり

江戸法輪寺 江戸の法輪寺より出此花江戸ノ花亭寫

少ノ葉ノ厚ノ大ノ花ノ多觀也

三度櫻 賀州金澤神社の前より一年ノ一度開花此

不鮮根の葉を賀州白子といふ所接し梅をさし四時

着花名木より白子の内寺家村観音寺の内より此櫻の事
貝原損軒壬申紀行より勢州白子の下ノ載之

鷺尾 藝園家ノ單瓣大輪白色の物を鷺尾とあり芝山ノ
相以テ重瓣中輪とあり訪問とあり芝山鷺尾一物二名
とあり

相似し櫻類

揚貴妃と然くあり揚貴妃ハ少色あり茎短く醉紅
色とあり花小也醉海棠今とて然くありハ種をなとあり
了とあり

泰山府君と尾尾とあり尾尾ハ花稠密とあり
ののち花とあり成結花形中一泰山府君ハ花とあり
事不載此其異あり

江戸ノ法輪寺ノ全一様花師ノ雜辨より江戸ハ茎短咲初の
時ワカとあり開放の後浮紅とあり法輪寺ハ重花厚く茎延て長
く花最遅

薩州排櫻 薩州鹿子島より琉球より道々三千の島より
とあり行此河より正月上元ノ花開ノ京都ノ排櫻より別
種也花ハ八重紅梅とあり正月半ノ開ノ紅梅とあり此種

夕山櫻

夕山櫻の樹は、夕陽の光を浴びて、紅く染まる。其の姿は、夕山の如く、雄渾たる。故に夕山櫻と云ふ。

有家

白樺櫻

白樺櫻の樹は、白く、花は淡く、清く、静かに咲く。其の姿は、白樺の如く、高貴たる。故に白樺櫻と云ふ。

仲正

中川の櫻

中川の櫻は、中川のほとりに咲く。其の姿は、中川の如く、清く、静かに咲く。故に中川の櫻と云ふ。

為家

岸の櫻

岸の櫻は、岸に咲く。其の姿は、岸の如く、雄渾たる。故に岸の櫻と云ふ。

俊惠

以上出夫木集

附 名所櫻

南殿櫻 一名左近櫻

連接別有字。南殿櫻者。一名上溝。即大櫻異名也。與此絶不同。

東齋隨筆草木類條曰南殿の櫻ハ本是梅の樹也

桓武

天皇遷都の時植

仁明天皇承和年中

枯失す。其の櫻の本を、其の後に天徳四年九月廿

三日内裏焼亡す。造内裏の時式部卿重明親王家の櫻と稱

す。植す。件の本は、吉野山櫻也。其の樹は、其の後に遷都

以前此地橘大夫の家には、有る。其の樹は、其の後に禁秘抄云。南殿櫻在紫

宸殿巽角是大畧自草創樹也。貞觀此樹枯。自根絶。崩上

時を言ふに、亦ん事と期を以て、今事、命を以て、此時、命を以て、
 多々の外あり、我年、改六十、多々の重なる、必期を以て、此、改、
 誠、此、毛、多、別、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 出、六田、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

西三條稱名院吉野詣記

文繁故不録此
稿書其和歌

眉間寺法、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

銘巴

按、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

稱名院

多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

稱名院

多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

稱名院

多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、
 多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、多、

迎客燕談春

水無瀬

るけりや山のけりきりしん

嵐山の櫻千本山城名跡志曰 龜山院此河吉野山の櫻

はけりしるけりしと此山祿和歌有花紅葉而今無詳見下の千本櫻

湏磨櫻 坂州湏磨浦若木櫻、名木也夫木集定家歌

桜をよそむるよそむるけりしん 湏磨の関やのあけりしん

尾上櫻 小倉百首前中納言匡房

高砂の尾上は桜咲けりしん 外山のけりしんよそむるけりしん

高砂櫻とよそむる後撰集素性の歌よそむる

小塩山櫻 夫木集隆祐の歌

大さや小塩の山のけりしん 桜をよそむるけりしんよそむるけりしん

志賀櫻 夫木集 後鳥羽院

志賀の山は桜咲けりしん 志賀の山は桜咲けりしん

舟蓮

志賀の山は桜咲けりしん 波瀾の初は桜咲けりしん

西行

最初の志賀の山は桜咲けりしん 志賀の山は桜咲けりしん

志賀の山は桜咲けりしん 志賀の山は桜咲けりしん 出夫木集

狩場櫻 丹後宮津より昔保昌、狩り所和泉式部、植りて後、
了今より保昌ハ式部、夫より丹後ノ住ル此ノ所ニ傳ル

推古櫻 藝州廣島より上古の本より傳ル此櫻より推古櫻ト

ソノ福ノ作ルルアリノ口傳

雲林院櫻 夫木集 西行歌

ソノヤリソノヤリノ昔より人々もソノヤリノヤリノヤリ

普賢堂櫻 又稱千本櫻 山城名勝志曰。在千本關魔堂。世謂普賢像。宜

胤卿記云。文龜二年。三月九日。詣千本念佛寺并普賢堂。櫻盛也。

親長卿記云。明應四年。二月十三日。參詣千本釋迦堂。遺教經聽

聞。次千本櫻一覽了。般若記百首謝人惠櫻花詩并叙。橫川○櫻

之於我國也。不曰櫻而云花。如洛之牡丹蜀之海棠。蓋所以貴之

也。普賢堂天下第一也。世傳鎌倉有普賢堂。按其地有櫻。俗謂之

普賢堂。或曰普賢像。和訓鼻與花音同。花之白且大者。如菩薩所

乘白象之鼻也。兩說孰是。平安城之西。有此櫻。實名花也。萬年之

距此地也。里許近。而每到春時。携客出遊。何可一日無此花耶。自

丁亥之亂。東西鴻溝。不見普賢堂者。七八年于今矣。距步之間。雖

花如歎。青春負公乎。公負青春乎。不可得而知也。今茲甲午。西人

乞降軍退解圍。不亦悅乎。今日有客惠櫻花者。所謂普賢堂也。予

與花一咲。知十歲之舊。可異哉。不啻生逢太平日。而得見此花。幸之又幸也。感喜有餘。作詩謝之云。七年不見普賢堂。蝶亦東西難。過牆。亂後逢花春似夢。一枝晴雪滿衣香。小補絕句。春暮看花普賢堂花。橫川杜宇聲中春欲闌。城西樓雪一株殘。人生易逐落花。變暗想明年子細看。

名所櫻

以下皆非一本之名。泛指其地所有之花。

西行櫻 長嘯子の西山山家記云小塩山の麓に蘭若あり勝持寺と書けり小野道風額ありかたり方丈の前より西行の植と云侍老木の桜あり朽殘るものこころけり春を告げぬらんむらわねえ

了悟あり 此花のこころけり朽れ

長嘯子

山やうらむ花のこころけり朽れ

此花のこころけり朽れ

衛門櫻 愚按古歌に用ゝる名は非指一本按山城名跡志卷八衛門の御息所の第古在太秦後選集衛門の御息所の家方秦の侍けりその花面白く折るをさうけぬハやえらぬ山甲の散るハ桜花白く折るをさうけぬ返一白く散る花の香とさうけぬ水けり種とるらん人の心と

考の後に後... 古ハ墨條の色一面の郊原... 有櫻樹數
 百株... 或後... 此歌の表傷の... 花の色を... 喪服の色を... 孟子曰讀詩者不
 可笑山城名迹志... 花の... 墨條... 孟子曰讀詩者不
 賢説... 頑愚の怪を信... 世の通
 例... 此歌の表傷の... 花の色を... 喪服の色を... 孟子曰讀詩者不
 以辞害詩人之志... 世續物語... 圓融院
 山城名跡志曰墨條寺の下... 昔寺... 吉公衣冠画像あり長谷川等
 伯、筆... 彩上... 秀吉公の筆... 和歌あり
 右の歌... 先細川吉首の所... 自筆の短冊あり
 千本の櫻

山城名跡志曰墨條寺の下... 昔寺... 吉公衣冠画像あり長谷川等
 伯、筆... 彩上... 秀吉公の筆... 和歌あり
 右の歌... 先細川吉首の所... 自筆の短冊あり
 千本の櫻
 非櫻名嵯峨嵐山の桜の總稱... 静庵雍州府志云古植千本櫻於
 嵐山而摸吉野山之景且建藏王権現至今櫻所殘堂迄絶
 渦櫻 非專指一種古歌多於鞍馬山花詠名馬の雲株...
 櫻品

寺櫻 延徳院桐谷 安井櫻 長樂寺櫻 靈鷲山櫻 又呼國 雙

林寺櫻 圓山安養寺櫻 大谷 烏部野櫻 智恩院櫻 妙

覺寺絲櫻

以上當世名花

阿蘭陀人ノ櫻をいふは阿蘭陀咬啣吧大小西洋の處皆有之

彼方草亦いふは實にのりたる珊瑚珠の如く其名をカ

イスウフロモンといふ

櫻品 終

